

特 228

234

昭和十六年十一月

第壹回展觀目錄

財團
法人

根津美術館

始





根津美術館 故根津嘉一郎氏ノ遺志ニヨリ其ノ蒐集ニ係ル東
 洋古美術品數千點ヲ基トシ、美術文化ノ向上ヲ圖ラン
 客年末設立セラレ、本年十月ニ至リ開館ノ緒ニツキタル
 リ、優秀ナル藏品ノ一部ヲ選ビテ第一回展覽會ヲ開催シ、茲

ニ其ノ品目並説明ヲ略記ス

昭和十六年十一月



第一室

鶉 圖 (重要美術品) 一幅

絹本着色 縦徑 八寸 横徑 九寸一分

徽宗皇帝の時、金の攻略をうけて宋室は南方に移つて南宋の時代となり、其後武力は不振であつたが、文運は依然として榮え、特に畫道は歴代皇帝を初めとして、宮室所屬の翰林圖畫院にも或は院外にも多くの名手が出て



南宋繪畫史を飾つてゐる。本圖は孤鶉に草莽を配して晩秋の野趣を現はした翎毛畫で、恰かもこの南宋初期に於ける畫院の一流派たる寫生による花鳥畫様式の一典型を示すものである。古くから筆者を李安忠と傳へ、馬越家の一幅と双幅であつた。李安忠は徽宗の宣和畫院に出仕し、高宗の紹興畫院に復職したる院體花鳥畫の代表者である。因みに本圖には方形白文の「雜華室印」(挿圖は原寸大)なる鑑藏印らしきものが捺されてゐて、この印章は他に宋元畫十數點に見られるが、何人の印章か明らかでない。

二

梨花小禽圖

絹本着色 縦一尺一寸六分 横九寸四分

一幅



南宋院體花鳥畫の一種に、小天地に花卉鳥蟲を描く折技法式なるものがあつて、刻明な寫實の追及に特徴をもつてをり、その作品は他の宋元畫と共に舶載されて特殊な愛玩を得てゐる。本圖もその様式の一例であるが、製作時代は元であつて、南宋末元初の錢舜舉の筆と傳へる。

三

漁村夕照圖 (重要美術品) 一幅

紙本墨畫 竪一尺一寸 横三尺七寸四分

瀟湘八景は湖南瀟湘の二水が落合つて洞庭湖に注ぐ地域の勝景に譬へて、北宋以來盛んに描かれた山水畫題である。室町時代に數種の宋元八景圖が舶載されて、その中の一種として遺つてゐるものに、牧溪筆と傳へる前田侯爵家藏煙寺晚鐘圖、松平直國伯爵家藏遠浦歸帆圖、石野家藏平沙落雁圖、及び本館藏漁村夕照圖の四幅がある。何れも「道有」の鑑藏印があるので、足利義滿の蒐集品で當時は八圖具はり、且その頃既に掛幅仕立であつたことが知られ、足利將軍家の御物として著名なものであつたが、室町時代末に各幅離散し、山市晴嵐、洞庭秋月、



瀟湘夜雨、江天暮雪の四幅は今は所在不明である。本圖は其後徳川家康、徳川頼宣、松平頼純の畫庫を傳來したもので、多くの東山御物中の逸品として喧傳されてゐる。牧溪法常は南宋末・元初の蜀人で、徑山の無準師範に參禪し、西湖の六通寺に住した禪僧で、傍ら水墨畫に長じたが、支那繪畫史上では重んぜられずして、却つて日本に於て有名になつた。本圖が牧溪であるか否かに拘はらず、日本水墨畫の發達に寄與するところ甚大である。(挿圖は原寸大)

夕陽圖

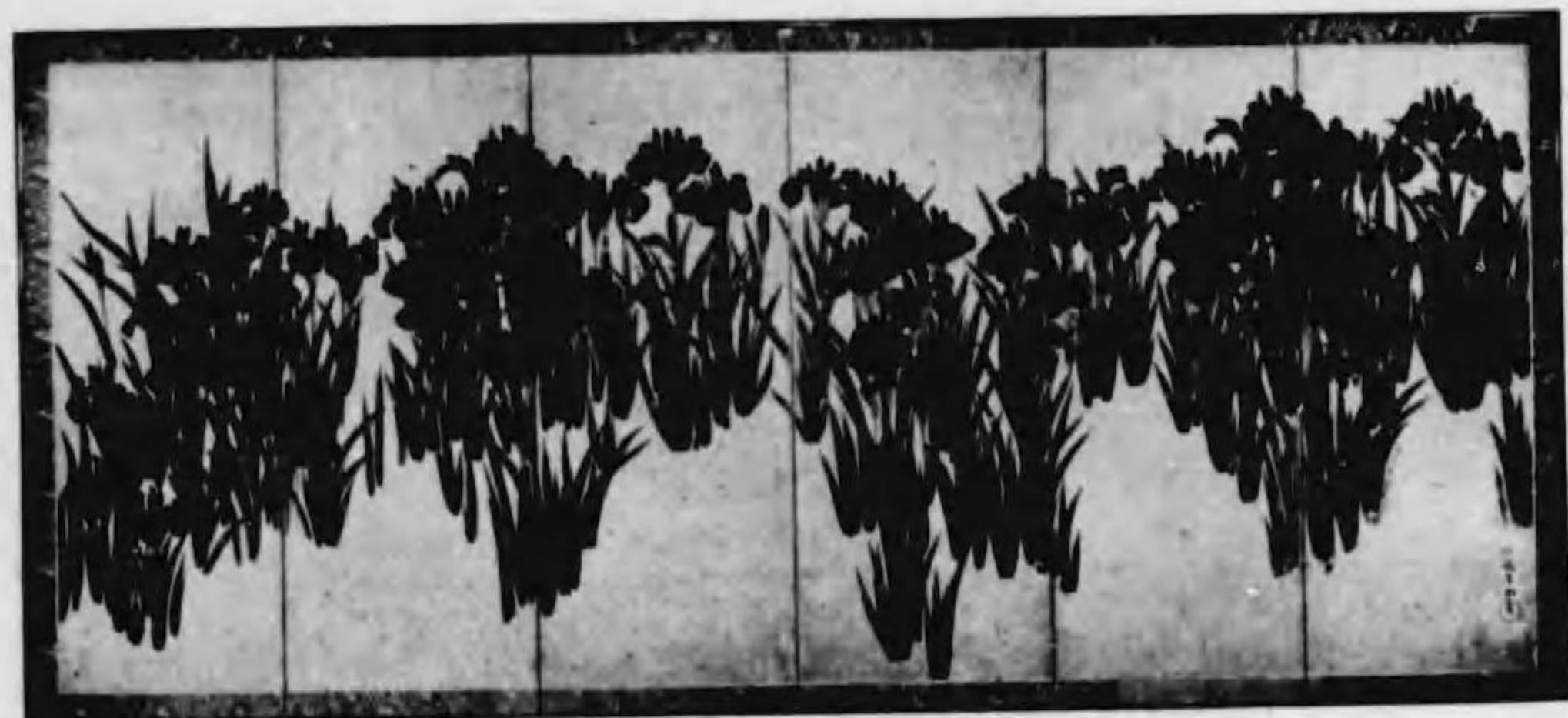
馬麟筆 (重要美術品)

一幅

絹本着色 縦一尺七寸 横八寸九分

南宋畫院の山水畫の一流に馬氏一家がある。父子兄弟共に家學を善くし、特に馬遠は日本で著名で、その馬遠の子の馬麟がこの夕陽圖の筆者であることが、「臣馬麟」の落款によつて知られ、殘照夕雲に映する廣闊な景觀を簡略な圖法の中に描き得た最も信用すべき南宋畫の代表作である。殊に「山含秋色近、燕渡夕陽遲」といふ賛と「甲寅」「御書」の印があつて、理宗皇帝の寶祐二年に當ることが知られて貴重である。麟は父遠と共に寧宗の畫院に出て祇候になつた。





燕子花圖 尾形光琳筆 (國寶)

六曲屏風一雙 金地著色
各隻 四尺九寸八分
横一丈一尺八寸二分

満開の燕子花を描いてゐるが、伊勢物語の「三河國八橋」に取材したものであらう。花は群青、紺青、葉は緑青で、夫々に濃淡を使ひ別け、濃厚な岩繪具が金箔地に映發して豊麗な色彩美を

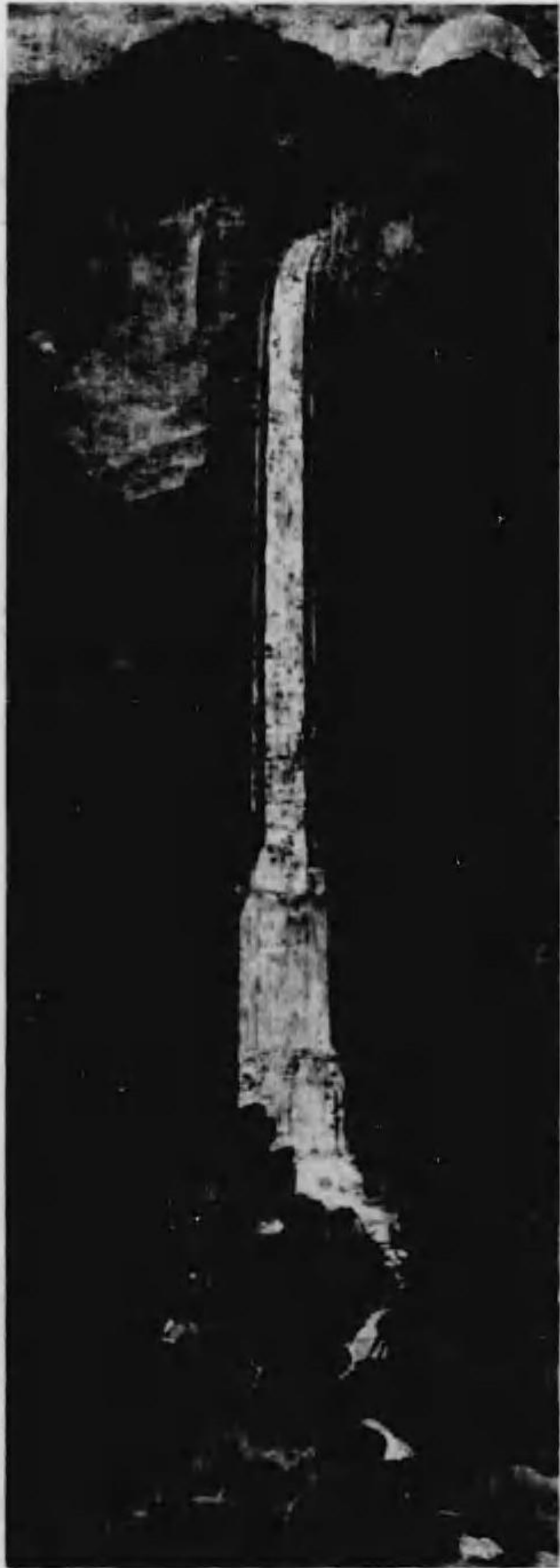


現はし、意匠の妙と相俟つて、この種の金碧裝飾畫の極致を示してゐる。各隻に「法橋光琳」と「伊亮」との款印がある。光琳は萬治元年に生れ、元祿十四年四十四歳で法橋に叙せられ、晩年江戸に出で、更に京都に歸つて、享保元年五十九歳で歿した。

那智瀧圖 (國寶) 一幅

絹本着色 竪五尺二寸六分 横一尺九寸一分

平安時代後期から、熊野三山の信仰が盛んになつて、その祭神や靈場を現はした垂跡畫が多く描かれるが、本圖は那智瀧を神格化した特殊な一例である。山端の目輪は飛瀧權現を象徴し、下方の社殿の傍の二本の卒塔婆は弘安四年龜山天皇御參詣の時に樹てられたものであると言はれる。その技法様式は鎌倉時代大和繪の特質を示して居り、大畫面に於ける濃厚な色彩配合の調和と整齊な構圖とは、相俟つて雄嚴な自然景描寫に成功したものである。



繪過去現在因果經 (國寶)

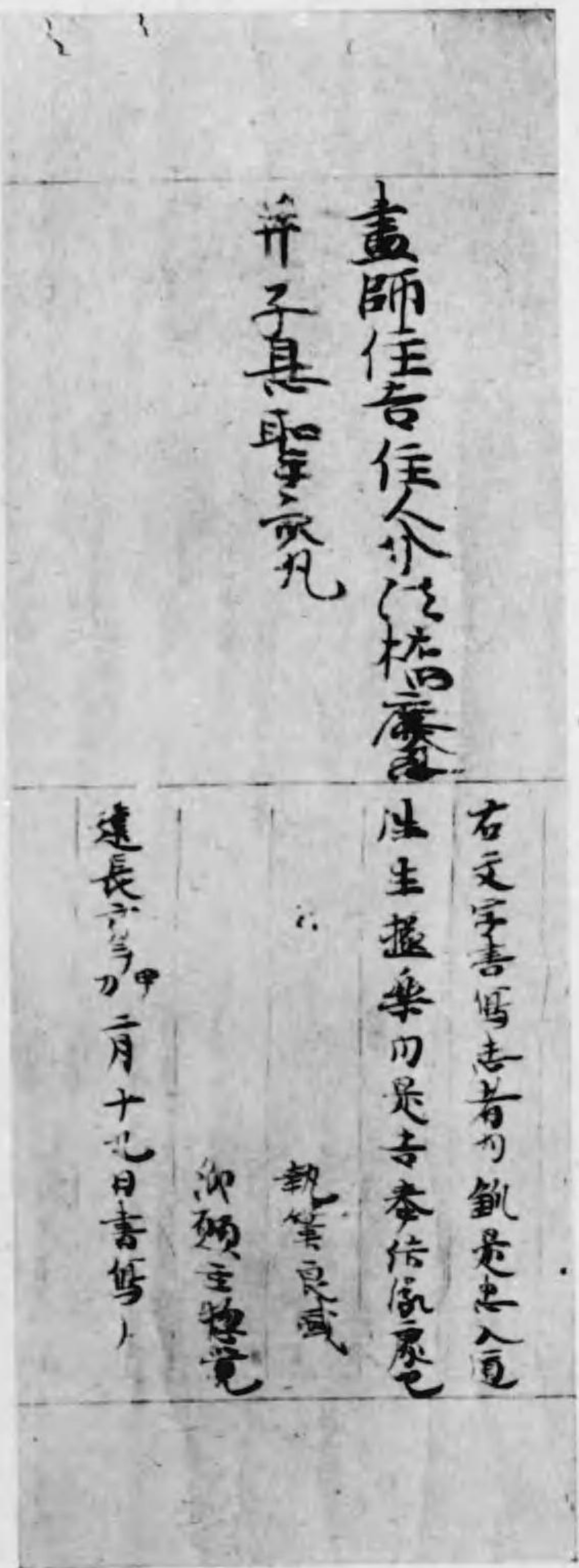
一卷

紙本着色 竪九寸一分 長三丈七尺六寸

求那跋陀羅譯の過去現在因果經四卷に繪を添へた繪過去現在因果經なるものが、八卷本の形式で奈良時代に作られ、その一部が現存してゐて、繪卷の源流になつてゐる。更に鎌倉時代にこの古因果經に基いて新に同種の繪因果經が描かれて、益田男爵家と本館とが各その一卷を藏してゐる。而して共に「畫師住吉住人、介法橋慶忍、并子息聖衆丸」「右文字書寫志者、爲餌是忠入道往生極樂、同是吉奉結緣處也、執筆良盛、紙願主惣覺、建長六年寅二月十九日書寫了」と卷末の上下段に奥書があるので、その書寫の事情が判るが、その人に就ては殆ど知られてゐない。その圖様は古因果經に従つてゐるに相違ないが、新時代的技法が加つてゐるので必ずしも忠實な



介侍遊此臨新院園
諸大相師並知太子
皆不出家過七日後
得轉輪王位五四元
下七寶白至各以所
知位自王言釋迦莊
姓於其方與玉開也
語心主飲喜身勅諸
臣并釋種子汝明相
師如其言下皆應日
夜侍衛太子於城四
門門各千人用通城
水一輪閣那因羅置
水而防護之復勅
邪輪地飛手諸內言
倍加警戒過於七日
勿使出家時王又來
至太子所太子遂見
身位奉迎顯而礼足
門觀起舌玉語太子
我肯既聞阿社陀說



摸本でない。それだけに繪卷の盛んな鎌倉時代の畫風の一端を傳へると共に、古典復興の時代性をも示してゐるものである。なほ本卷は「第二」とあるが、第二卷後半部に當る。

畫師住吉住人外は松平藤房
并子具聖之丸

右文字書寫志者の凱是也入道
住吉振樂の是寺奉信家屋也

執筆良風

次郎主惣寛

遠長三年の二月十日書寫ノ

天 狗 草 紙 (重要美術品) 一 卷

紙本著色 竪一尺一分二厘 長三丈三尺九寸九分三厘

天狗草紙は南都北嶺の諸寺諸山の僧侶が、僣慢我執の外道に陥つてゐる有様を天狗に喩へて諷刺した七卷の繪卷で、現在は摸本として東京帝室博物館に興福寺と東大寺の兩卷、原本として帝室博物館に延暦寺及東寺、前田侯爵家に園城寺、久松伯爵家に傳三井寺、及び本館に傳三井寺の各卷が藏されてゐる。本館本の詞の内容は、諸天狗の成佛を説いてゐるからして天狗全體の結論の卷、即ち第七卷に位するものであつて、所謂三井寺の卷ではない。興福寺卷の詞に「于時永仁四年之天、初冬十月之日なり」云々とあるから、以て此等の製作時期と推定することが出來て、數ある當代繪卷中でも特色ある種類のものである。なほ本卷は詞二段に繪一段で完結してゐるものと思はれる。



内大臣殿歌合 (國寶) 一卷

紙本墨書 竪八寸五分 長一丈五尺四寸七分

この歌合は元永二年七月八日に内大臣藤原忠通が六條顯季を判者とし、藤原實通の九條第に於いて催したもので、草花と晚月を題として十一番宛を合せ、各番毎に判詞を記してゐる。これは平安時代末期に編纂された類聚歌合二十卷本中の一であつて、夙に群書類從に收められて著名である。その筆者に就ては西行法師といふ所傳があるが、それよりも古くて、原本に最も近き頃のものである。

内大臣殿歌合

判者

藤原公経但願子判

左方人

備後守季通判

曾孫季津衣

無名女房

馬持頼國

判部補尹時

左大臣判部補

侍昌

曾孫季津衣

前和泉守道任

判部補

右方人

前淡路守仲房

右中推重

判部補三三

判部補

故中宮上総亮

判部補

若菜

判部補

朝二

草花

晚月

番

左

季通

けりしものいふは木ははらふもよもよも
いふはらふもよもよもよもよもよもよも

右

仲房

ふもよもよもよもよもよもよもよも
よもよもよもよもよもよもよもよも

左
ふもよもよもよもよもよもよもよも
よもよもよもよもよもよもよもよも

右
ふもよもよもよもよもよもよもよも
よもよもよもよもよもよもよもよも

左
ふもよもよもよもよもよもよもよも
よもよもよもよもよもよもよもよも

右
ふもよもよもよもよもよもよもよも
よもよもよもよもよもよもよもよも

左
ふもよもよもよもよもよもよもよも
よもよもよもよもよもよもよもよも

右
ふもよもよもよもよもよもよもよも
よもよもよもよもよもよもよもよも

左
ふもよもよもよもよもよもよもよも
よもよもよもよもよもよもよもよも

右
ふもよもよもよもよもよもよもよも
よもよもよもよもよもよもよもよも

左
ふもよもよもよもよもよもよもよも
よもよもよもよもよもよもよもよも

右
ふもよもよもよもよもよもよもよも
よもよもよもよもよもよもよもよも

古今和歌集

(重要美術品)

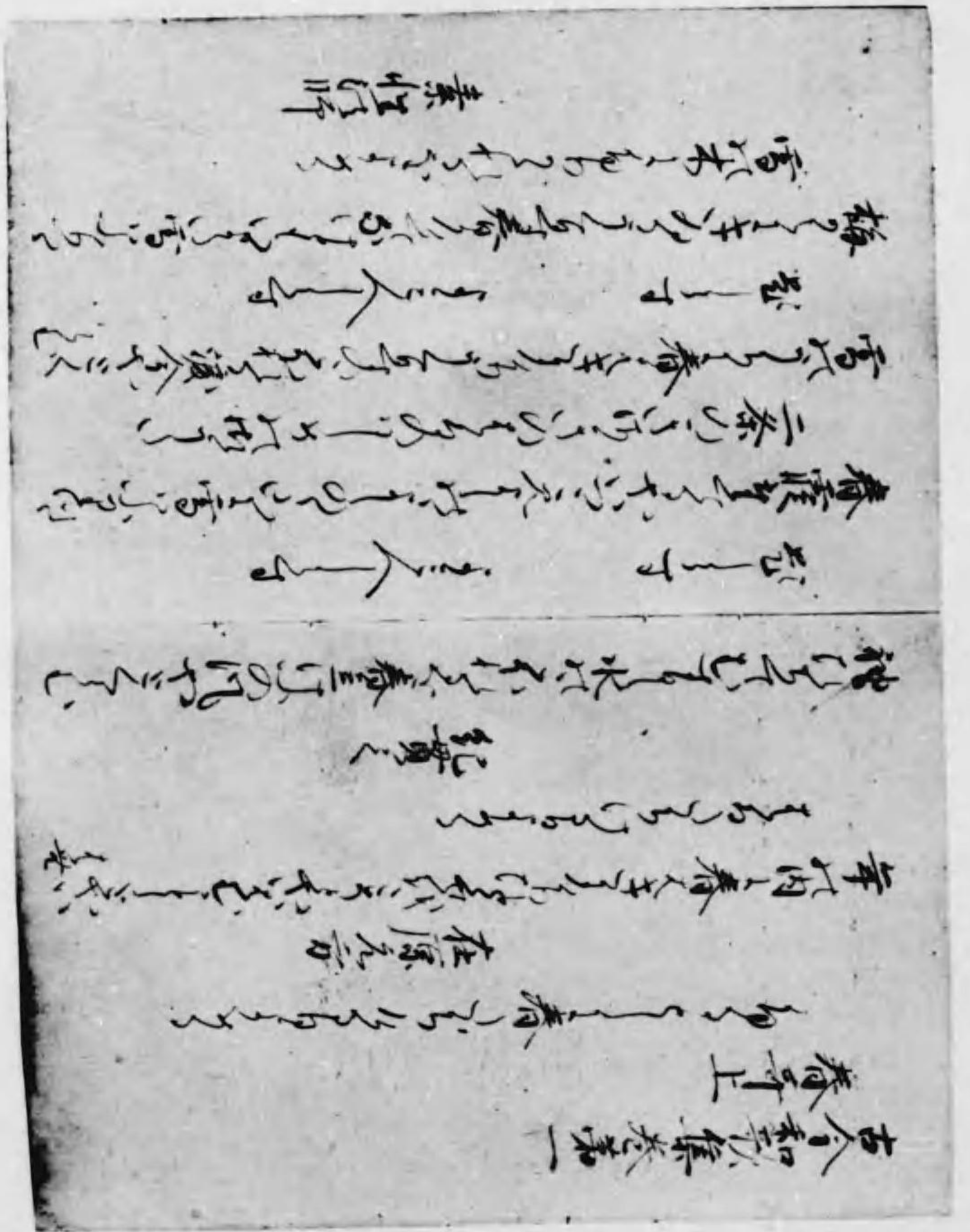
一帖

紙本墨書 竪七寸四分 横四寸九分

古今集の諸本中で最も廣く用ひられてゐるのは、藤原定家の校訂した本であるが、本帖は嘉祿二年四月九日定家の本奥書があり、所謂嘉祿本である。而して奥書に明記せられた如く法名を融覺と言つた爲家即ち定家の嫡子が文應元年にその子爲氏をして書寫せしめ、文永二年に至つて内宮大禰宜某に授けたものである。従つて古今集の證本として甚だ貴重なるものである。

右之奥書先人御自筆也、文應元年七月五日書寫之、右金吾筆也、桑門愚老融覺(花押)

文永二年六月日、家之秘説授内宮大禰宜、日來在京間了、且者是爲奉増神之威光、所授傳説也、



天保二年六月日家秘江後
 松屋肩衝(美作)
 中元茶入 仲威完而文清記

此集家所得雅況、今且以此記之
 了見其價頗昂、然亦自書之代
 傳家(年)書之、先緒極有識、深
 下諸直、雖此不用、但此用格、亦
 其身、而好、不、自、此、茶、入、之、同、皆、用、
 天保二年六月日家秘江後
 松屋肩衝(美作)
 天應元年七月各日主之
 右(美作)



大名物 松屋肩衝 (重要美術品) 一點

高二寸五分五厘 口径一寸六分 胴径二寸九分五厘

所謂唐物茶入で、細膩な鉛土、精巧な薄作、手取りの軽さ等すべてこれ唐物の約束である。茶入は古來茶器中の王とされる所、中にも唐物は至貴とされたもので、加之肩衝は各種茶入中式正として推される所であるが、殊に松屋肩衝にあつては口造り鋭く胴が張つて其姿は堂々と、鐵呈色の釉薬また美しく、更に顔れの景色を添ふるあり、古來珠光・利休・織部・三齋・遠州・石州・不昧等の大茶人が唐物肩衝中の第一流として擧つて推賞を惜まなかつたのもまた宜なりといはねばならない。底は大方の大名物唐物茶入と同様に板起しの所謂嵌め底である。一般に唐物茶入の舶載・賞翫が室町初期茶會の勃興と共に始まることは容易に推定される所で、應永末年頃の

著なる遊學往來の新渡之莊物中に各種茶人の名が見えてゐるのは以て其傍證となすべく、従つて唐物茶人は概して之を明代所製と目し得るが、其製作地に至つては現在では遺憾乍ら南支方面といふ以上には未だ審かにし得ないのであつて、元來は恐らく香藥壺ならんといはれてゐる。

松屋肩衝はもと松本周室所持によつて一に松本肩衝ともいはれ、其後義政の有に歸し、次で珠光義政より之を拜領、更に珠光より其弟子古市播磨澄胤に傳はり、澄胤また之を奈良の松屋源三郎久行に譲り、爾來徐熙鷲繪・存星長盆と共に松屋名物の筆頭として其名天下に聞え、かくて以後松屋肩衝と稱されるに至り、而してかの北野大茶會にも出陳され、其後代々松屋に傳へられたが、幕末に及んで松屋から島津家に譲られ、更に轉じて故青山翁の有に歸したもので、錚々たる青山莊藏物の茶器中にあつても殊に玉座を占むるものである。

附屬物 一、三齋好蓋 一枚 一、御物袋 一、袋 四（珠光好龍三爪純子・利休好木綿廣東・織部好波梅鉢純子・遠州好捻梅唐草純子）袋内・外箱 一、藤重作黒塗挽家・同革袋 一、内箱 一、外箱 一、羽田五郎作黒塗四方盆・同内及外箱

中興名物 相坂丸壺 一點

高二寸一分二厘 口径九分 胴徑二寸二分六厘

古瀬戸丸壺中首位にある名茶入で、遠州所持の中興名物として古來茶家の間に有名である。遠州以後大阪の鴻池分家山中善五郎に傳はり、其後金澤の龜田是庵の有となり、次で藤田家に移り、更に轉じて故青山翁の有に歸したものである。

相坂の銘は古今集雜歌の部讀人不知の

逢坂の嵐の風は寒けれど

行衛しらねは佗ひつゝそぬる

に由來するもので、其意は又再び之程の名茶入に行逢ふかを期し難いといふにある。

甕高く胴張つて姿よく緊り、總體に得もいはれぬ高雅の妙趣を漾はせてゐる。釉色また頗る變化に富んで、柿金氣・黄・青黒等瀬戸釉の特色をあらん限りすべて一體に集め、また顔れ、釉溜り等の趣致にも盡させぬ味ひがあり、景色の妙いふべくも



ない。

附屬物 一、蓋七枚 一、蓋箱書付遠州 一、御物袋 一、袋四（紺天鷲絨鳳凰紋・花色梅鉢小紋龍丸金襴・
 龜甲紋錦・茶地筋純子腰に小石疊）袋箱 一、木形 一、黒柿挽家書付遠州・同袋 一、内箱書付遠州 一
 張成作内朱五葉盆・同袋・同箱書付遠州 一、江月・江雪兩筆添文二卷



大名物 柴田井戸（重要美術品） 一點

高二寸三分 口径四寸七分 高臺徑一寸六分

井戸は古來茶盃の帝王と稱され、俗に一井戸二樂三唐津などといは
 れてゐるが、其所以は蓋し姿が雄大で、釉色が落付いて澁く、しかも
 上品で變化があり、茶盃として外觀即ち胴・腰・高臺脇・高臺・高臺
 内・内側曲面・見込等各其特色を發揮して夫々豊かな趣致を表すのみ
 ならず、之を使用する際に幾多茶盃中でも品位氣格に於て斷然群を抜
 く感があり、茶の風味を保存發揮する上に於ても間然する所がない
 故であらう。井戸の特色としては先づ其姿が堂々として居り、高臺脇
 には俗にカイラギと稱する鮫皮狀の釉斑があり、釉色は大體枇杷色で
 小貫乳が總體に表れ、高臺は匏で上下に削り取られて竹の節狀を呈し
 高臺内にも施釉されてゐるのが普通で、之がまたカイラギ風となつて
 居り、見込には普通重ね焼の痕（目）が四つ乃至六つある。而して總體
 の作行は重厚豪宕といふを得やう。

井戸の名の由來に就ては從來諸説があり一定しないが、其名の既に

天正以前に存したことは明かで、最近の調べによれば、奈良の茶人善玄が大和井戸堂から見出し、其後尚井順慶の有に歸した筒井筒が井戸命名の起原らしい。井戸は山上宗二記や長闇堂記にも高麗と明記されてゐるのによつて其朝鮮所産なることは明かで、また井戸の中に古萩と鑑せられるものが往々にして混じてゐることは、萩焼創始の由來から考へて又以て井戸の朝鮮所製説を裏書するに足るものといふべきであらう。而して其年代はもとより李朝と目すべきである。

井戸の一種に青井戸なるものがあり、其名は釉色の青味を帯ぶるのに出たものであるが、柴田井戸は即ちこの手に屬するものである。もと信長所持で、柴田勝家之を拜領したのによつて其後此名を以て呼ばれるに至つたもので、勝家の敗亡と共に青山家の臣朝比那氏に傳はり、次で大阪の千種屋(平瀬家)の有に歸し、更に轉じて大阪の藤田家に入り、かくて最後に故青山翁の手中に歸したものである。總體稍薄作淡枇杷色で表面は青味を帯び、カイラギは白く表れてゐる。外側には轆轤目が強く表れて華かな感があり、内面は深く、一體に雄勁鋭俊の氣が横溢してゐる。



中興名物 長崎堅手 一點

口径 四寸三分五厘 高二寸五分 高臺徑 一寸八分五厘

遠州所持の中興名物として堅手中古來殊に有名である。長崎の銘は元長崎久太夫所持によつて遠州命名にかゝる所で、其後大徳寺孤蓬庵に寄進され久しく同庵珍什の一つであつたが、天明頃不昧公同庵主寶海和尚に所望して之を譲り受け、爾來松平家に傳はり、後故青山翁の有に歸したものである。

堅手とは要するに白磁の一種で、主として朝鮮李朝所製のものであるが、其作行が味ひ深いのによつて古來茶家の間に頗る賞玩されてゐる。本長崎堅手は其作行殊に面白く、佗びた裡に變化豊かに、至極茶向きの名器といふべきで、淡青味を帯びた白釉また寂びを添へて、遠州の之を愛玩せるまた宜なりといはねばならない。

志野茶盃 銘山端 (重要美術品) 一點

高二寸八分 口径四寸五分 高臺徑一寸八分



志野焼は桃山時代から江戸初頭に亘つて美濃の瀬戸系諸窯で製された陶器で、胎土は白色で和かく、長石質の白釉が施されてゐるが、これは室町以降旺んに舶載された明代白磁を陶器に於て模したものと云ふべきであらう。普通釉下に鐵繪で文様が描かれてゐるが、この手法は繪唐津・繪瀬戸と同様に李朝鐵砂の影響に出たものといふべく、又往々にして胎土上に鐵泥を化粧掛けし之に文様を白く彫り表したものがあつて、鐵化粧が白釉下に鼠色を呈する所から俗に鼠志野と呼ばれてゐるが、これは技法上では李朝三島手の象嵌搔落し手法の感化に出たものとみられるが、其表現に於ては李朝三島手の象嵌文に類してゐる。志野焼にはかく外來陶磁の影響が看取されるが、其器形・文様の意匠に於ては純日本趣味が發揮されて居り、近世初頭の豪放華麗な時代精神が遺憾なく表現されてゐる。志野焼は當初は瀬戸焼乃至織部焼と呼ばれたもので、志野の稱は享保以後に起つたものである。

この茶盃は即ち鼠志野の手に屬するもので、山端銘は玉葉集夏歌の部「今上御製の五月雨は晴れむとやする山の端にかゝれる雲のうすくなりゆく」から採つた歌銘で、蓋し化粧地に白釉のかゝつた様を右の歌意に擬へたものであらう。總體青鼠色を呈し、胴中央には帶状の一線が繞り、外側には龜甲・檜垣文様、見込には網代文様が彫り表されてゐるが、其意匠は放膽で、雄健な姿と相俟つて時代の氣分をよく傳へてゐる。志野茶盃中異色あるものといふべきである。

黄瀬戸寶珠香合 (原寸) 一點



所謂あやめ手に屬するもので、これまた桃山時代から江戸初頭にかけて美濃の瀬戸系窯で焼成されたものである。

この香合は國燒香合中でも茶家の間に古來殊に喧しいもので人によつて首位に推すものさへある位である。其形はいかにもふつくりとして優美な趣があり、且つごつしりとして品格がある。蓋甲に施された丹礬藥の發色は鮮かで、其中に金氣藥を配し、寂かな佗びた裡に一脈の華かさを漾はせてゐる。盆付の焦げの味ひにも上品な寂びがあり、丹礬も蓋裏まで透り、實に一點の非の打ち所のない黄瀬戸香合中の随一といはねばならない。そこにはまた交趾香合では表し得ぬ日本獨特の幽雅な香りの存することをみるべきである。

交趾臺牛香合 一點

交趾型物香合中でも臺牛は古來殊に茶家の間に喧しいもので、故青山翁愛藏の本香合は就中大龜に次ぐ大物として天下に著聞して居り、もと大龜と共に藤田家に珍藏されてゐたが、先年故翁の手中に歸したものである。蓋甲地には黄、牛には紫、側面には緑の軟釉が施されてゐる。



交趾香合は一般に胎土は卵色を呈して細膩、普通之に黄・綠・紫の軟彩釉が施されてゐるが、稀に翠青色の彩釉の施されたものもあり、又白檀といつて釉藥を施さず素焼生地に漆を塗り之に金箔を置いたものも存し、すべて型造りになることが其特色である。其製作地に就ては從來諸説があり、中でも南支民窯とする説が最も有力であつたが、近來はまた佛印説も次第に唱へられてゐる。日本に交趾香合の舶載をみたのは江戸初期以降で、其製作年代もほゞ之に準ずるものとみてよからう。交趾香合が南海方面に汎く行き亘つてゐることは近時彼地からの將來品中に之を散見するのによつても察せられ、元來は恐らく南海方面の諸民族間に日用されたものであらう。

第二室

宗峰妙超墨蹟 一幅

紙本墨書 竪一尺七分 横二尺五寸七分

宗峰妙超は播州の人、鎌倉萬壽寺の佛國國師に謁し、次で大應國師の鉗鎚を受けて虛堂の宗風を悟得し、嘉曆元年紫野大徳寺の開山となる。花園天皇はその道風を愛されて宮中に法要を問ひ給ひ、興禪大燈國師の號を賜ふ。後醍醐天皇も師を召して說法せしめ、高照正燈國師號を加賜せられ、當代禪苑の高峰である。請はれて崇福寺に下り、再び大徳寺に歸り止まつて、延元元年五十六にて寂す。その墨蹟は師の器量と並びて品格高く、就中數點の絶品と目されるものが傳つてゐる。本書は夫等に伍して敢て遜色なきもので、大徳寺開創以前の元亨二年に宗園に附與したものである。なほ澤庵宗彭がその筆翰の妙絶に驚目した旨の添狀が附屬してゐる。

徧界不_レ會藏、處方是時人難_レ彈避、時節、恰似_レ半夜放_レ鳥鷄、左_レ之右_レ之向_レ甚處、辨明、直得陰去陽來、雪寒冰冷、吾家大用觸處繁興、豈敢逐_レ洞山圖_レ執一闍底之狂解、雖然如是諸人且道、貴_レ其耳_レ孰與_レ貴_レ其眼、元亨壬戌、宗峰叟妙超、書以與宗圓禪人(印) (印)

禪林振首座賦
 獨向滄溟理
 釣絲從他鬢
 髮白垂垂莫
 教錯認浮漚
 體目作全潮
 妙用機

元德二年歲在庚
 午仲春上澣五日
 前雙林 楚俊書

明極楚俊墨蹟 一幅

紙本墨書 豎一尺一寸二分 横二尺三寸六分

明極楚俊は明州慶元府の人、虎巖淨伏の法嗣で、彼地に於て既に道譽盛んであつたが、わが書幣に應じて元德二年六十九歳にして來朝し、後醍醐天皇より佛日饒慧禪師の號を賜はる。建長、南禪、建仁等の諸山に歴住し、延元元年七十五歳で寂す。本書は來朝した年に振首座に贈つた偈で、氣魄に滿ち、墨痕鮮やかなものである。

禪林振首座賦、獨向滄溟理釣絲、從他鬢髮白垂垂、莫教錯認浮漚體、目作全潮妙用機、元德二年歲在庚午仲春上澣五日、
 認浮漚體、目作全潮妙用機、元德二年歲在庚午仲春上澣五日、
 前雙林楚俊書 (印) (印) (印)

誰家長不死
 死少意來均
 始憶八尺漢
 俄成一聚塵
 黃泉無曉日
 青草有時春
 行到傷心處
 松風愁殺人

字の初

石室善玖墨蹟 一幅

紙本墨書 豎一尺一寸五分五厘 横二尺七寸三分

師は文保二年二十五歳にて元國に渡航し、碩學に參叩して居ること九年、嘉暦元年歸朝し、道名既に高く、五山の名刹に董席し、武州平林寺の開山となり、元中六年九十六を以て示寂す。師は詩文に長じ、併せて筆翰の技も巧みで、氣骨稜々の趣致があり、この寒山詩は又その一典型である。

誰家長不死、死事舊來均、始憶八尺漢、俄成一聚塵、黃泉無曉日、
 青草有時春、行到傷心處、松風愁殺人、寒山詩 (印) (印)

觀世音菩薩心經

未所說經典及過去未來三佛名号常受持
 讀誦解脫書寫廣宣流布遠離貪嗔癡心疑
 何得身解三難三喜提終不虛妄世尊故我
 成佛若有女人聞如是法現轉女身轉女身
 已當為受記得何轉三難三喜提身曰
 離垢多能何如度何難可三難三難他說是
 經已畢德藏菩薩摩訶薩及諸比丘比丘尼
 菩薩摩訶薩聞天龍夜叉乾闥婆阿羅漢迦樓羅
 緊那羅摩睺羅伽人非人等聞佛所說皆大
 歡喜

取以為救之暇披覽典籍藉全身延命者
 及存業者經之中釋教乘上由是作
 準三寶歸依一教敬焉一切經卷軸已
 抱讀之者以至滅心上為國家下及生
 類之業百身祈禱為福開之者無量劫
 間不復惡趣還難此則堪受敬拜
 天平六年或在中式始焉
 靈巖司德部所禮四位上門部主

楞伽阿跋多羅寶經 一切佛語心品卷七

大教愛寺沙門智嚴註

介時大慈菩薩復白佛言世尊
 願為說一切菩薩解開緣覺滅正
 受次第相續自下明三乘正受但名同
行異顯優劣者命備詳
介此大慈按若善於滅正受次第
 相續相者此即明乘蓋
此即明乘蓋我及餘菩薩
 終不棄捨滅正受樂門此相明入正
並既善優不隨一切聲聞
 緣覺外道惡痕次明捨劣並謂不
隨聲聞名蓋善捨
之二乘外道斷其斷
樂惡痕佛告大慈諦聽諦聽善
 思念之當為汝說次明何
故先飾詞大慈白佛
 言世尊唯願為說次明何
祈云許佛告大
 慈六地起菩薩摩訶薩及聲聞

註 楞伽經 (國寶) 一卷

紙本墨書 豎九寸二分 長七丈二尺七寸二分

智嚴註の楞伽經卷第七の一卷を書寫したもので、麻紙の原
 表紙に楞伽阿跋陀羅寶經と外題あり、撥型の密陀軸と原紐と
 を附けて完備してゐる。本文は一行十一二三字詰の大字で、
 註は雙行である。天平十二年五月一日光明皇后の御願文を附
 した同種ものが古椿堂文庫にあるから、本巻も同時代に書
 寫され、當代寫經生中の第一流の筆になるものと思はれる。

佛本行集經

一卷

紙本墨書 竪八寸七分 長二尺七寸三分

天平十二年五月一日、光明皇后が御兩親の御菩提のために敬寫せしめられた一切經の一部で卷第卅四である。

卷末に隋の清河長公主の舊跋をも同時に書寫してゐることは、此種の寫經中に類例少く、當代の願經研究に貴重な資料となるものである。

經五清河長公主楊 女元覽兒
 今前河清李長孫 皇孫孫長孫 孫長孫
 禮身皇親皇如先禮法界現地善像
 後道百善如雲用則隨願不窮所有
 乃稱之成五印惟九上 慈尊倍斯
 禮王覺義能廣難達以證邪空教異
 與言說方便導引大乘小乘之教為
 若海舟楫半字滿字之教作晴雲煙
 極妙門量觀敬造一切 尊理一部
 運以是標舟道 文皇帝嚴聖后訊
 禪教遊法海廣有慈德凡生今上表
 居一大清聖公永流河公且永延福
 身長壽身嚴敬上官貴極陰教四
 群之苑七女若乃品令敬呈奉法
 寫法會佛道
 皇后禮佛代先明子奉為
 尊身禮心一值太政大臣府君寫
 此贈經一值攝式夫人敬寫一切
 經論及律莊嚴現了伏願恩期得圓
 今實皇助永成菩提之樹長道般若
 之律又願上今 聖願恒速福壽
 下及察奉共盡忠節又先明子自製
 誓言弘濟俱勤勿除煩障妙願指
 法早契菩提乃至持燈無窮無有久
 下開皇持卷難相濟空一切逆方會
 拜覺路
 天皇十年五月廿日

今時世尊作是思惟往昔諸佛多他何伽跋
 何羅呵三類三佛在何方所轉於无上微
 妙法輪於時世尊發是心已其地即時自然
 踊出異於餘方
 今時世尊復如是念往昔諸佛多他何伽跋
 何羅呵三類三佛他云何而轉无上法輪為
 高坐轉為高附轉於時世尊發是心已波地
 方所即現五百師子高座世尊見此五百座
 已即敬心以敬禮去諸世尊故三迎圍繞
 二高座已至第四座即之其上踞跏而坐解
 如獅子无所怖畏无所驚動
 佛陳如五比丘著即白佛言希有世尊即
 念慈有如許佛未同說法之云何乃有若干
 高座今時佛告五比丘言汝諸比丘今應當
 知此賢劫中有五百佛出現於世三佛已過
 入般涅槃我今第四出現於世餘者皆未續
 讚興顯
 今時世尊復如是念過去諸佛多他何伽跋
 何羅呵三類三佛他為轉法輪為轉銀輪轉
 以梨輪轉瑠璃輪為雷轉於赤真珠輪轉為
 強輪轉車渠輪轉帝網輪轉珊瑚輪轉七寶
 輪為轉木輪
 今時世尊如是念時於心內發四智見知過

第三室

釋迦多寶二佛像

一個

金銅製 高七寸六分六厘

釋迦が靈山に法華經を説いた時に地より七寶の塔が涌出し、塔内の多寶如來が讚嘆して、請うてその側に坐せしめるといふ法華見寶塔品の所説に基づくものであつて、向つて右が釋迦、左が多寶如來であらう。臺座の正面は香爐と香合を中心に俗體の供養人物を線條彫にしてゐる。背面は花枝を捧ぐる二菩薩に脇侍された釋迦が薄肉彫され、臺座には「太和十三年三月四日、九門縣南郷村寛法生兄弟四人、爲亡父母、造釋迦多寶、願使亡者生天、常以佛會故記之」と銘が刻されてゐる。太和年間の造像銘ある北魏佛は他に數點傳はつてゐるが、その中で本像は最も優れた製作のものである。



七 佛 像 一個

鍍金 高六寸四分七厘 臺座低幅 六寸四分 同奥行 三寸六分 中心佛高一寸五分五厘

多角形の臺座に取附けられた花形座の中央から出てゐる蓮華が、唐草の如くに七枝に分れ、各枝の末端に頭光を負つた坐像佛が納留めされてゐて、この形式のものを俗に枝佛と稱してゐる。中央の佛は釋迦と推測されるが、其他は何佛であるか不明で、その配列も現状でよいのか否か判らない。この七佛は釋迦以前の過去佛を現はし、長阿含經等の所説に基づくものである。而して七佛信仰は六朝から唐に亘つて盛んであつたので、當時の作品が相當に日本にも傳來してゐるが、夫等の多くは粗末な製作であるのに、本品は甚だ精巧な技法であるところに價値があり、恐らく隋代の作と思はれる。



銅製 竪七寸四分 横六寸一分五厘



阿彌陀らしき本尊の左右に二比丘と二菩薩、前には香爐の左右に二天と二獅子を現はす。一見すれば高浮彫のやうであるが、これは銅板を打出して、更にその上に鑿で鎚起と刻出を加へて仕上げたものであつて、所謂打出佛の一種であるこの種の遺例は至つて少く、且又簡単なものであるが、本品にあつては頗る複雑精巧な技法によつた貴重な一例であつて唐時代の作である。

銅製變様獸面華文鑑

(重要美術品)

一器

高九寸一分

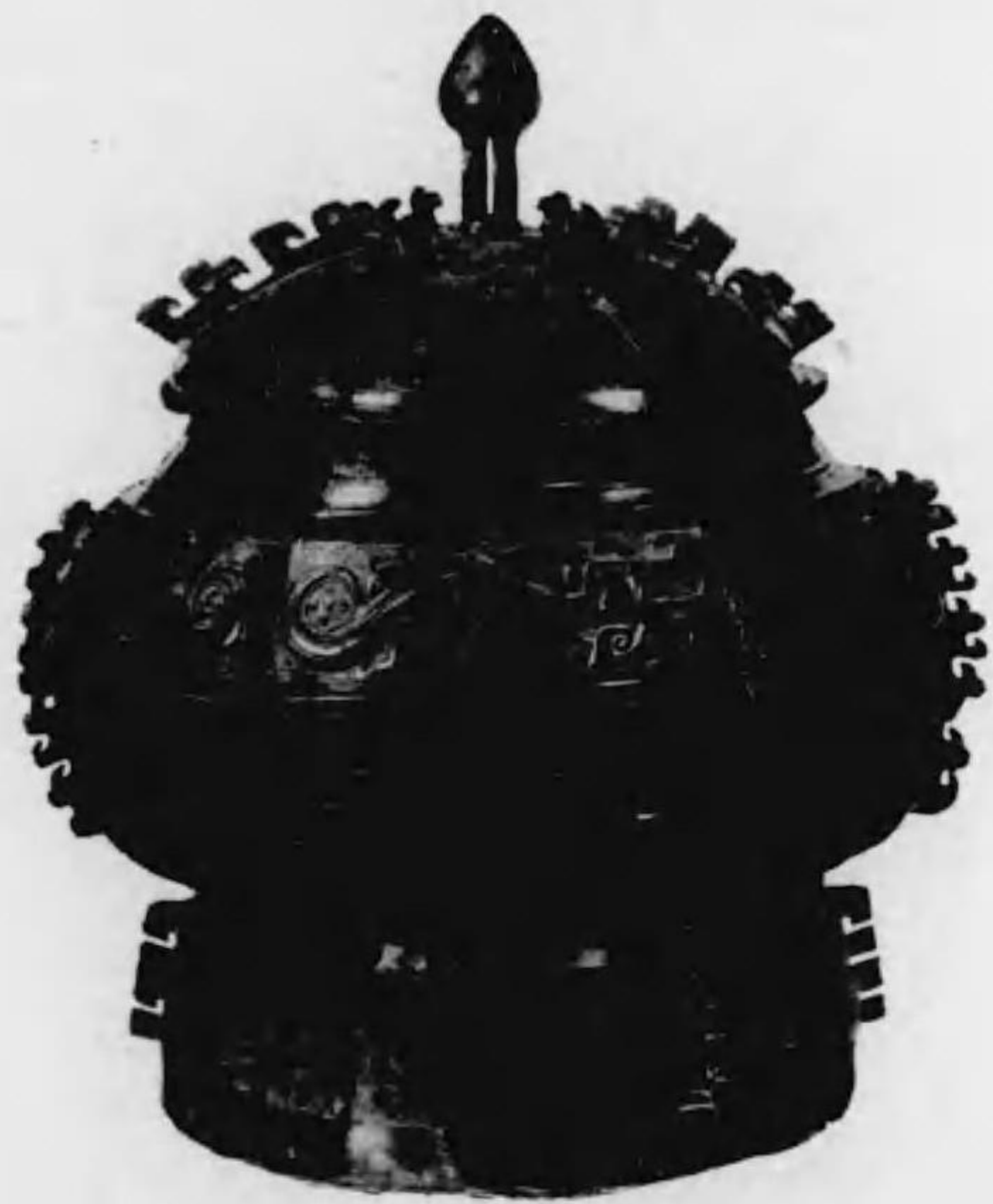
鑑は「説文」に大盆なりと記し、又「周禮」の凌人に「祭祀共冰鑑」とあり、その註に「鑑如甄大口、以盛冰置食物於中以禦温氣」と見えて、その用途を示してゐる。本器は同治中代州から出土したと傳へる攻吳鑑と制を同じくして、まさに右の鑑に當るもの。それは坐りのよい完好の大きな鉢で、口縁下に一突帯を繞らして外形を整へ、飾るに獸文から脱化した華文、その外、西方的な影響を思はせる數條の華文帯を以てしてゐる。是等の器形なり裝飾文は、よく戰國時代の特徴を具象して、現存せる其時代の鑑中の一佳品である。その器側の上邊に小突起の四出してゐるのは、蓋しもと器を擧ぐるに資した名残であらうか。

銅製虺龍饗餐文罍

一器

高一尺二寸二分

罍は酒酒を貯藏して尊に給する器であり、その形制は圈足を有する大きな壺形をなして、自ら用途に相應するものであり、また蓋を伴ふを常とする。この器は罍のうち器腹の横に張つた安定感の多い一類に屬し、上に六方に禽形の飾と中央に寶珠形鈕を作つた蓋を覆ふところ、古銅器として整美な形と言ひ得る。器全面の裝飾は饗餐虺龍の兩文を主とする點で他と變りはないが、表出が大まかであり、且つ雄雅な趣を具へてゐる。是等から見ると周代中葉の作とすべきであらう。本器と同一の器が現在アメリカのフリヤ美術館に儲藏せられてゐる。蓋しもと双器をなしたものであらうか。二者共に出土後、年時を経たとみえていま傳世の古色を呈してゐる。



第四室

銅製犧首夔龍饗養文盃 (三器之右) 高 二尺四寸一分

銅製犧首虺龍饗養文盃 (三器之中) 高 二尺三寸五分

銅製犧首夔鳳饗養文盃 (三器之左) 高 二尺三寸八分 (以上、重要美術品)

本三器は六、七年前に支那河南省彰德府外侯家莊の所謂殷墓から出土したと信ぜられる遺品である。その形は酒を和する器たる盃と稱せらるべきものに屬するが、而も通有の盃とは趣を異にして、その器體は著るしく丈の高い柱狀をなして四個の款定が之を承け、鑿は大きな怪獸の體軀を以てし、盛上つた器の上邊では右の鑿を着けた側に心臟形に近い口を開き、他方に長い筒狀の流(注口)を斜出するところ、從來殆んど例を見ない形であり、飾るところの裝飾文また極めて繁褥怪奇な動物文の高浮彫を以てする點、まさに支那三代古銅器の特色を具象して餘すところないものと言ひ得る。三器はその所傳に加へるに、鑿の下に夫々右・中・左なる文字があつて、もとい組の寶器であつたことを明らかにしてをり、而も一見相似た外觀のうち、その圖文は悉く細部を異にして鑄造の入念さを察せしめるものである。器の出土地並びにその製作よりみて、現存殷代銅器の最も優れた作品として、その名の海外にまで著聞してゐるのは故あることである。



五
一



五
〇



第五室

菩薩立像

石造 全高 五尺一寸三分

ガンダーラを含む北西印度の一隅は、アレキサンダー大王に征服されて後、大夏及び大月氏國が建設されて、ギリシヤ藝術等を攝取したる特異な印度藝術が創造され、これを俗にガンダーラ藝術と呼び、紀元頃から四世紀に亘つては特に盛大であつたが、その藝術の中でも佛像彫刻が傑出してゐる。この菩薩立像もその一例であつて、ガンダーラ佛としては後期の製作に屬する。



以下の如來形佛頭二、菩薩形佛頭六、佛手一の計九點は何れも天龍山石窟の佛像である。根津嘉一郎氏はこの種の像片四十六點を蒐集されたが、この九點以外は總て諸外國に寄贈された。天龍山は山西省太原府の西南八十里、北齊時代の別都である晋陽の西三十支里の地にある。南北朝時代にこゝに石窟を開掘し、隋、唐代にも續いて掘られ、東西兩峰に亘つて二十四窟あつて、窟内には大小幾多の佛像が刻出されてゐる。本館藏品は夫等を鑿斷して將來したもので、何れも唐代の製作に屬する。



五七

分二寸一尺一高 造石 頭佛



五六

分四寸三尺一高 造石 頭佛



五九

分一寸四尺一高 造石 頭佛



五八

分二尺二高 造石 頭佛



六二

分七尺一高 造石 頭佛



六〇

分二寸二尺一高 造石 頭佛



分五寸九 造石 頭佛



分三寸八 造石 頭佛



分七寸三尺一長 造石 手佛

第六室

仁清 色繪山寺文様茶壺

(重要美術品)

一個

高七寸二分 口径三寸一分 胴徑六寸

仁清は江戸初頭京都の陶工で、其生年は明かでないが、丹波桑田郡野々村の出生にかゝり、元來野々村窯の陶工であつたが、後京都に出て仁和寺の門前に窯を築き、仁和寺宮の御愛護を蒙ること厚く、其妙技を賞されて宮から仁の字を許され、通稱を清右衛門といつた所から略して仁清と稱するに至り、以後作品にも仁清の路印を用ひ、また宮廷からは播磨大掾の稱號を賜はつた。仁清の名を成した所以は多々存するが日本陶磁史上殊に注目すべきは支那傳來の上繪付に於て始めて独自の純日本様式を確立した點に存するといはねばならない。歿年は元祿初年頃と推定されてゐる。

三耳の茶壺で、其形や大きさは國寶若松文様茶壺と類して居り、仁清の茶壺中では小なる方に屬する。其秀れた成形に彼の陶技の妙をみるべく、優雅な形の意匠にはまた眞壺や唐物茶入を模して之を巧に自家藥籠中のものとし新に獨特の姿を創作した彼の苦心を窺ふことが出来る。肩から腰に至る全體に山間に隠見する樓閣を松樹の間に描き、山の峯は金銀の點彩を以て表してある。即ち蒔繪の意匠を模してはゐるが、表現は繪畫風である。此峯に點する金銀彩を花に見立て、此圖は吉野山を表すものと解しても差支へはない。一般に仁清の茶壺は腰に上釉を缺き胎土を現するのが普通であるが、之は殆ど疊付に至る迄施釉してあるのは一寸異例で、姿の優しい典雅麗な繪付の作品である。丸龜藩主京極子爵家の舊藏品たりしものである。底部に仁清の大印がある。



六六



古伊賀 耳付花入 銘 壽老人 一點

高 九寸二分 口徑 三寸二分四厘

佗物の王座を占める且つ日本趣味の極致を表現する古伊賀は桃山時代から江戸初頭に亘つて製されたもので、其豪快放膽な意匠技巧は時代精神を傳へて遺憾がない。この花入は古伊賀諸豪中にあつて殊に其名天下に聞えたもので、元不昧公所持たり、壽老人と銘されたが、恰かも其姿は前額長き壽老人の風貌に髣髴たるものがあり、前面の青萌黄は濃く流れて臺の邊りに溜りを見せ、器の左右に押し出された凸凹は、曲線美豊かにして、古伊賀の特色を發揮してゐる。土より生れ出た柱の如き二本の耳は、力あつて器の全面に躍動し、妙絶を極めてゐる。

六七

砧青磁竹ノ子花入 一點

高九寸八分 口徑二寸二分

砧青磁袴腰香爐 一點

高三寸六分 口徑四寸六分



青磁中砧手とは釉面が稍失透氣味で所謂粉青色を呈したものをいひ、其爽快鮮麗な釉色によつて古來青磁中最も貴ばれてゐる。砧手は主として南宋時代中支那浙江省龍泉縣龍泉窯で焼成されたもので、胎土は概して淡灰色を帯び細膩で、器形にも宋窯特有の緊密な秀麗さがある。

竹ノ子と呼ばれるものは砧青磁中の一種の様式で、此種のもは我國にも比較的多く將來され茶家の賞翫を博して今尙ほ遺品を諸家に存してゐるが、この花入の如く美

しく大きいものは又類稀れなりといはねばならない。堀田備中守正俊傳來のもので、此種砧手竹ノ子花入中代表的なものといふべきである。

又砧手香爐中最も有名なのは袴腰形のもので、大中小種々あるが、本器は比較的大形の方に屬する。加之此種香爐の遺品には古來使用のために釉面が磨損し或は火熱によつて開片を生じ、又疵を存するものが多い中であつて、此香爐の如きは釉色美しく無疵にして釉面に磨損を認めない點に於て殊に寶重すべきもので、古來世に著聞するまた故なしとしなない。口造りは縁邊に至るに従つて薄く、口は稍幅廣く一文字に延びて鋭く、腰の所脚の中心に稜が立つて足底に及んでゐる。



金欄手寶相華文下蕪花入 一點

高九寸六分 口徑一寸一分



金欄手とは普通赤繪に金彩を付したもので、支那古陶磁中でも殊に鑑賞家の賞玩措かざる所のものである。金彩は金箔を焼付けたもので、之に文様が細い針彫で表されてゐる。金欄手の遺品は多く明代嘉靖年間官窯所製と目されてゐるが、金箔焼付の手法はすでに宋代にも存したことは、例へば定窯遺品に金彩の付されたもの、あるのによつても明かである。又金欄手が東山時代に舶載されたことは、君臺觀左右帳記中に「箔貼しの茶碗」の名が見えてゐるのによつても知られやう。この花入は胴部龜甲地紋中の赤タミ四稜形窓内に金彩で寶相華文が表され、又首付根の赤タミ帯状内には同じく金彩で唐草文が付され、五彩の文様と相俟つて絢爛華麗の趣致を盡して居り、金彩の磨損少きも寶重すべく、更に器形の殆ど類品を見ない點に於て實に金欄手中の逸品といはねばならない。なほこの種器形は俗に下蕪形といはれてゐるが、正しくは逆蕪形といふべきである。

吳須赤繪花鳥文壺 一點

高七寸六分 口徑三寸四分



吳須赤繪は放膽雄健な繪付によつて古來我國茶家の間に頗る愛玩され來つたものである。其製作地は南支福建省龍溪縣石碼窯とされて居り、其年代に就ては明末清初の南京赤繪と技巧・様式に於て共通する點があり、また皿の見込に往々書かれてゐる天下一の語が日本特有の語で桃山時代から江戸初期に亘つて我國工匠の間で旺んに使用されたものである點等から推してほぼ明末清初所製のものと思はれてゐる。

吳須赤繪で我國に傳世するものは多く鉢・香合・皿の類で、此壺の如きは類品稀少な吳須赤繪中の珍器と稱さねばならない。肩には龍文が描かれ、胴には行平菱地紋の中に四區に窓を劃して之に各暢達の筆致で描かれた花鳥文が配され、更に上下に赤玉を點じ、肩と裾には奔放の筆勢で吳須赤繪特有の文様が表されてゐる。

寶相華銀平文袈裟箱

一合

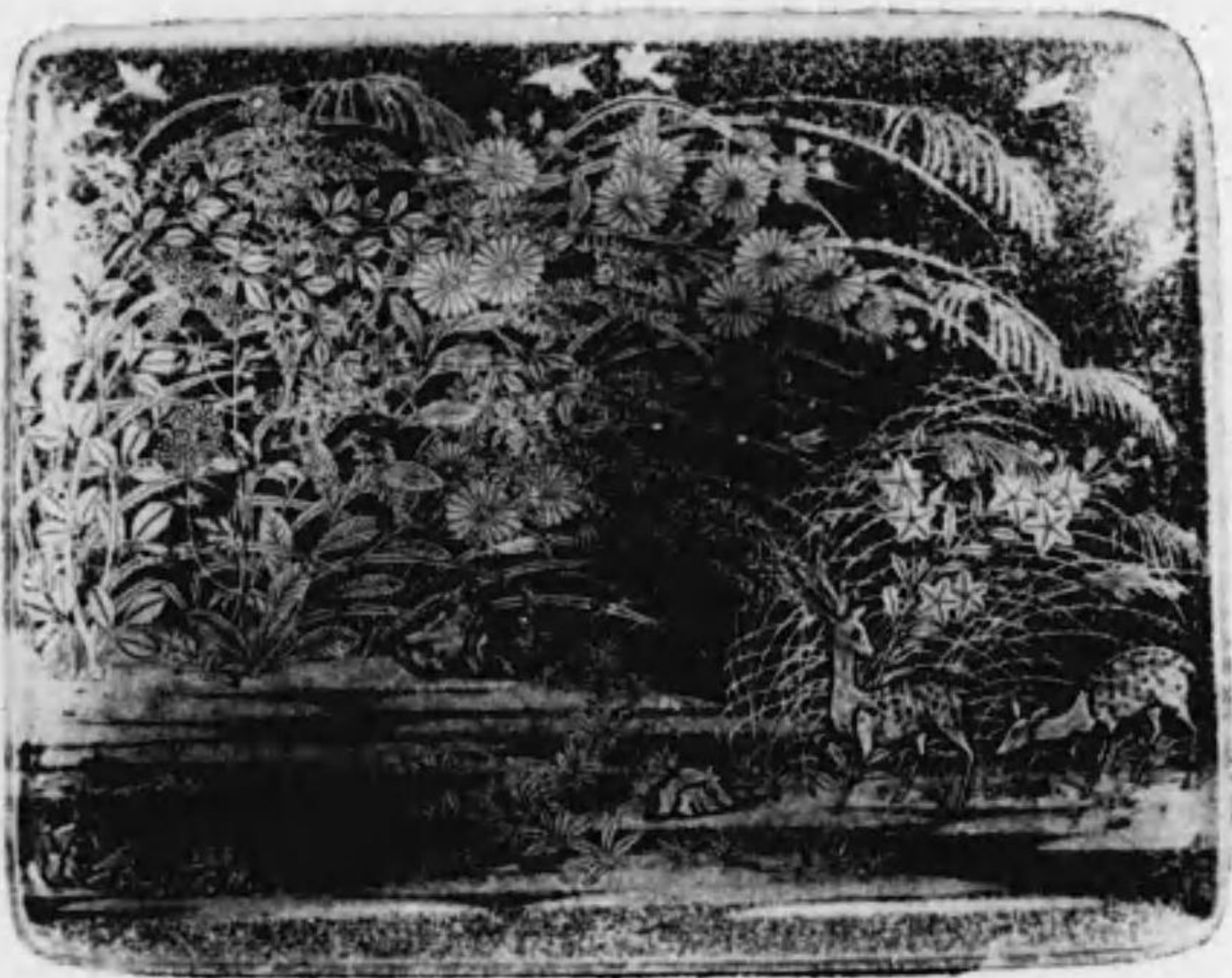
竪一尺二寸七分 横一尺一寸四分 高四寸

方形隅丸の浅い箱で、錫置口を付け、總黒漆となつてゐる。蓋の甲盛りは頗る穩かに流れ、塵居との關係も優美で、一見教王護國寺藏毘陀穀絲袈裟箱と共通してゐる。文様は蓋甲に寶相華と蝶鳥を、四周に忍冬の如き唐草の連環形文を縁取りとし、四側の上下には連珠文を廻らし、中に寶相華と蝶鳥を表してある。

圖様は頗る婉麗で平安朝の特色を窺ふに足り、彼の仁和寺藏冊子箱並びに寶珠箱の文様と一脈相通じてゐる。箱の内部及び蓋裏には唐草蝶鳥の銀平文を簡單に施してある。之等は何れも銀平文に毛彫を施してあるが、其大部分は年月久しきに亘つた爲め落剝の浮目に逢つてゐる。

平文は薄き金銀板を文様に切り漆面に裝つた技であつて、奈良朝に盛行したことは正倉院御物に徴しても明らかである。而して平安朝初期に於ても數多くの平文が作られてゐることは文獻により明かであるが、未だ實物には一例にも接しなかつた。然るに此袈裟箱は器體・文様等平安朝の代表的な蒔繪遺品に酷似して居り、恐らく平安朝唯一の平文遺品ではないかと思はれる。





秋野蒔繪手箱

一合

竪一尺 横七寸八分 高四寸四分

鎌倉室町時代の手箱の秀れた作例は今日相當數へられるが、此手箱も亦其等と相並ぶ優品の一つである。

長方形、適度の甲盛りを持つた心持ち腰高の箱で、合口には錫の置口を附けてある。外部は總て金梨子地とし、秋野の情景を總體に蒔繪してある。蓋表を見るに、野邊に遊ぶ雌雄二匹の鹿を中心に、萩・薄・野菊土坡・岩石等を配してある。之等は主として研出蒔繪の技法で表してあるが、鹿・岩石を肉上とし、草に止まる鈴虫は錫を嵌入し、秋草に置く露は銀鋳を打つてある等技巧と材質の變化により全體に程よき高低を作り情趣を高めてゐる。四側面は同じ秋野を略同様の技法で蒔繪し、之には叢中に兎を研出してある。蓋裏は土坡に秋草を描き、飛遊せる小禽雄子と柵に止まれる小鳥を配し描いてあるが、何れも梨子地に金研出して表され、時に雉子の眼には朱漆に金梨子地を點じてゐる。器形穩かにして、圖様は高雅の趣に富み、蒔繪の技巧又精練を極めてゐる。彼の出雲大社藏秋野蒔繪手箱の圖様を繼承するものといふべきであらう。



名物 花白河蒔繪硯箱 (重要美術品) 一合

竪 七寸五分 横 六寸八分 高一寸五分

此硯箱は始め義政の遺愛品で其後男山の昭乗の有となり、八幡名物として松花堂に傳はつたものといはれてゐる。黒漆塗りの入角に胴張りがあり、覆蓋造りの簡明なものであるが、其器形には頗る妙趣が溢れてゐる。圖様は新古今集雜歌の部藤原雅經の

最勝寺の櫻は、鞠のかゝりにて久しく
なりにしを、その木年経りて風に倒れ
たるよし聞き侍りしかば、をのことも
に仰せて、異木をその跡に移し植えさ
せし時、まづ罷りて見侍りければ、數
多の年々暮れにし春まで立ち馴れにけ
る事など思ひ出で、よみ侍りける



馴れなれて見しはなごりの春ぞとも

など白河の花の下蔭

を意匠したものといはれ、蓋甲には咲き誇つた櫻樹の下に立つ公卿に岩石・土坡・落花を配し「花白河」の三字が樹幹に表してある。此圖様は室町時代の大和繪を髣髴せしめるものがある。蒔繪の技法はすべて單純な金の研出蒔繪であるが、巧みに梨子地を併用し、蒔方にも工夫を凝し、極めて粗剛な表現ではあるが、筆意を重んじ、飽く迄も淡雅の趣に富み、恰かも一幅の繪畫を見る如き思ひあらしめた點は注目に値する。蓋裏と身の内は粗く落花を散し水滴と八角形硯を置いてある。總じて古の蒔繪は、意匠と運筆の妙趣が深く、到底今日の蒔繪に求めることが出来ぬものである。



名物 春日山蒔繪硯箱 (重要美術品) 一合

縦 七寸九分
横 七寸三分
高 一寸六分

此硯箱には添状があり、それには「義政公五面硯之記」
とあつて

尾州家 おごこ山 みかさ山 鴻之池善右衛門 隅田川

久須見小兵衛 千とせ 三宅宗平 春日山 山里とも

と記されてゐる。即ち元は「山里の硯」といはれたもの
なることが知られる。歌繪に成る蒔繪の作例は鎌倉時代
から散見されるが、室町時代には圖様の意匠を和歌に採
つたものが流行し、相當傑作が残されてゐる。此硯箱も
名物の一つであつて、古今集秋歌の部壬生忠岑の「山里



は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に眼をさましつゝ」
の歌意に意匠を採つたものといはれ、圖中秋草の中に
「わびし、け、れ、は」等の文字が配されてゐる。形は
方形削面で、總て金梨子地を施し、蓋表は金研出の小山
に金高肉の鹿・岩・秋草を表し、銀の満月を嵌入してあ
る。蓋裏は梨子地と肉上等にて山麓の茅屋に人物を描き
伏して山上の鹿の音を聴く様を表してゐる。之等の圖様
は器形と融和し、整然と施され、蒔繪の技巧又精妙で、
肉上を要點に用ひてある。概して剛勁なる趣の裡に溫和
な情調をも感ぜられ、室町時代の風格をしのぶことが出
来る。身は總梨子地に秋草を蒔繪し、傘を組ませた水滴
を納めてあるが、誠に見事な作である。



八〇

古蘆屋松梅文眞形霰釜 一口

高六寸七分 口徑四寸六分五厘
胴徑(羽先共)八寸八分

總體霰地文で、鑲付は鬼面、左右には松梅文が精美に鑄表され、前後には左記の銘が鑄出してあつて製作年代や工人名の明かにされる點に於て茶釜史上のみならず、ひろく鑄金史上頗る注目すべき遺品といはねばならない。

奉寄進

高野山

寶幢院

西坊公用

永正丁丑(註、十四年)

施主蘆屋本

金屋大工

宣秀



宣秀は氏を大江といひ、其遺作として明かなものに周防國興隆寺鐘(享祿五年銘・山口縣立教育博物館現在)豊前國上毛郡求菩提山藥師如來鑿口(天文五年銘)筑前糟屋郡天津神社鐘(天文六年銘)等がある。なほ蘆屋釜の名は尺素往來にも見えてゐて、既に一條兼良の頃から相當旺んに製されて中央にも其名の聞えてゐたことが知られる。

古天明十王口釜 一口

高五寸七分 口徑四寸一分
胴徑九寸一分

古天明中の秀作で、胴には方丈得月雪村筆の銘が鑄出され、鑲付は遠山である。室町時代の作。

八一

茶室

布袋 蔣摩訶問答圖 (重要美術品)

一幅

紙本墨畫 縦一尺一寸八分 横一尺六寸

本圖は、布袋と蔣摩訶とが溪に浴して、布袋の背に四眼が現はれたので蔣摩訶が禮拜する題意を描いたものである。樹根の上に押された朱文方印は「兒童不識天邊雪、把乍楊華一例看」、王羲之流の楚石の賛は「花街鬧市恣經過、喚作慈尊又是魔、背上忽然楷□眼、幾乎驚殺蔣摩訶」と讀まれてゐる。本圖と酷似した様式で同じく楚石の賛あるものが、黒田侯爵家、淺野侯爵家、岩崎小彌太男爵家、原善一郎氏の諸家に傳はり、何れも因陀羅の筆なることが知られる。かゝる減筆體の道釋人物畫に長じた因陀羅の傳は判らないが、賛者楚石梵琦が明の洪武三年に歿してゐるから、同じく元末の畫を善くする禪僧であつたと思はれ、却つて日本に於ては室町時代に既にその作品が舶載されて、著名な人物となつてゐた。

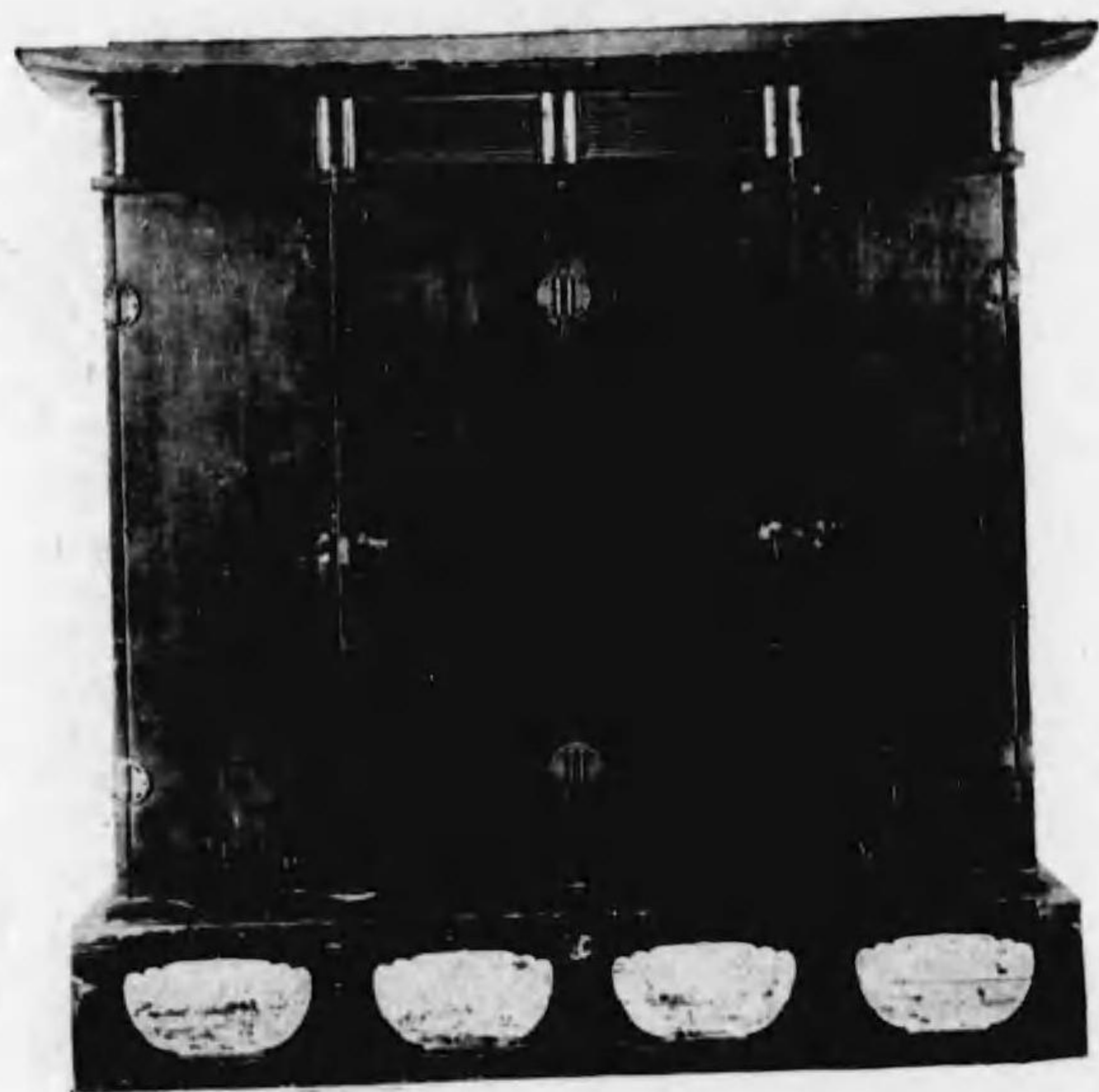




名物 青磁 花入 銘 夕端山 一點

高七寸五分五厘 口徑三寸一分

所謂天龍寺手に屬するもので、之また龍泉窯所製であるが、砧手に比して年代は降り明代と目されてゐる。釉色は砧手に比して暗黄綠色を呈し、胎土また彼に比して粗厚で、作行もまた稍厚手で鈍くなり彼の如き勁銳さを失つてゐる。しかし其釉色の幽玄な點から我國では茶家の賞翫を博したのもあり、此花入の如きは天龍寺手遺品中の逸品といふべきで、其品格ある薄手にして端正典雅な作行は天龍寺手中稀れに見る所で、不昧公の愛玩されたる又故ありといはねばならない。其趣致は頗る茶席向きに開然する所なく、名物として古來貴ばれる所以であらう。形は所謂中燕に屬するものである。又夕端山の銘は續後拾遺後西園寺入道前太政大臣の「かぜかほる雲に宿かるゆふはやま花こそはるのどまりなりけれ」から出たもので、箱書付は不昧公の筆に成る。



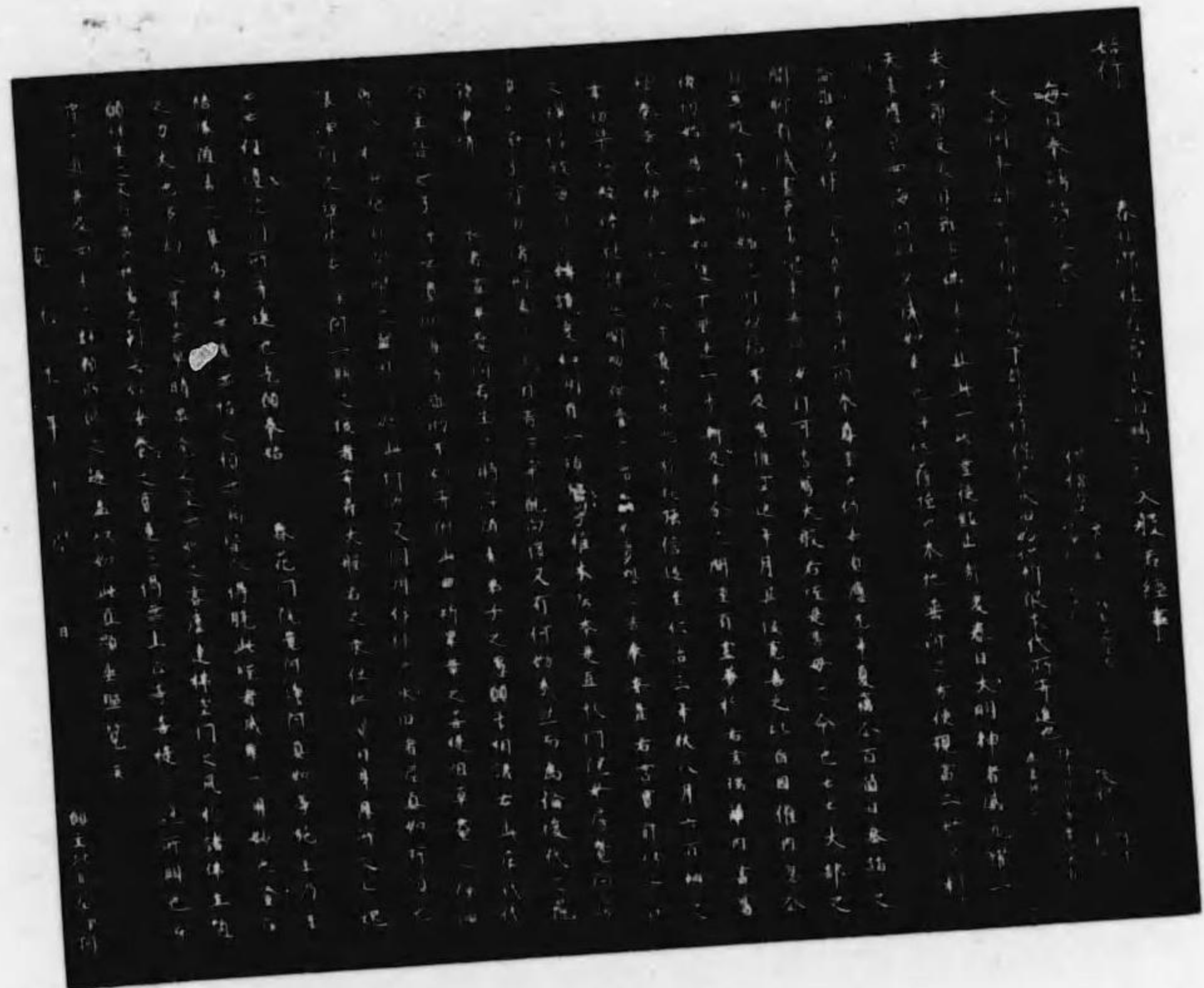
室外

春日若宮大般若經入厨子 一基

高五尺六寸 幅四尺九寸七分

構造整美した春日厨子で、總體黒漆塗となり、上部には櫃子、下部には格狭間が付され、内部には黒漆塗の經箱六十個があり、比丘尼淨阿の一筆に成る大般若經の寫經が納めてある。扉裏には挿圖の如き寛元元年十月願主比丘尼淨阿の奥書ある銘文が刻されて居り、納經の由來が詳記され、之

によれば寫經は寛喜年間に始まつて仁治三年秋八月に至つて完成したものであるが、かゝる一筆經にして完存せるは極めて稀れで、其點かの筑前宗像神社藏のそれにも比すべく寶重に値するものといふべきである。即ち前記經卷及び刻銘と共に此厨子の如きは年代の明かなる貴重な遺品といはねばならない。なほ底裏には願主淨阿の寫經奉入に添へての土地寄進に關する刻銘がある。



113
315

昭和十六年十一月二十五日印刷
昭和十六年十一月二十八日發行

非賣品

不許
複製

編輯者 兼 財團 法人 根津美術館
代表者 小栗襄三

京都市中京區新町通竹屋町南
株式會社 便利堂

印刷者 代表者 佐藤濱次郎

終

